

Title	反ナチ抵抗運動における人文主義の精神
Author(s)	大川, 勇
Citation	ドイツ文学研究 (2016), 61: 1-17
Issue Date	2016-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/210195">http://hdl.handle.net/2433/210195</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 反ナチ抵抗運動における人文主義の精神

大川 勇

近年、ナチズムの「魅惑」が声高に語られるようになった。「ファシズムの美学」、あるいは「政治の美学化」という言葉とともに広がってきた言説であるが、ナチズム研究の領域で、ヒトラーの支配体制の特質としてこのテーマに言及したのは、おそらくエーバーハルト・イエツケルをもって嚆矢とするだろう。一九七九年にシュトゥットガルトでおこなわれた講演「ヒトラーとドイツ人」において、歴史学者イエツケルは「ドイツ人はヒトラーのことを恐れたというよりも、むしろ愛した<sup>(1)</sup>」と述べたのである。

イエツケルによれば、「ドイツ人がある種の暴君に対するように、彼に対して疑いを抱き、苦惱し、激昂することはなかった<sup>(2)</sup>」。ヒトラーが独裁者であったことを否定するのではない。ナチ体制におけるヒトラーの果たした役割をめぐって交わされた「プログラム派」と「機能派」の論争において、イエツケルは明確にプログラム派に与していた。ナチ体制を「多頭制」支配、ヒトラーを「弱い独裁者」と規定する機能派に対し、ナチ体制はヒトラー中心の「単頭制」支配であり、ヒトラーこそが「ナチズムの決定的推進力<sup>(3)</sup>」であると見なしていた。そのイエツケルが、ヒトラーは重要な政治的決定を自分一人を下す「独裁者」ではあったが、一般のドイツ人から恐れられるような「暴君」ではなかったと言

うのである。なぜか。この独裁者が国民支配のために国民の人気を必要とし、圧倒的多数の国民もまた、その求めに応じてこの独裁者を「愛した」からである。

イエツケルの分析によれば、ヒトラーが独裁者になれたのは、逆説的にも、彼が強固な支持基盤を持っていなかったからである。よく知られているように、ヒトラーのナチ党はヴァイマル共和国の国会選挙で最後まで過半数を制したことがなかった。一九三二年七月の選挙で三七・四パーセントの得票率を獲得し第一党に躍り出たものの、続く一九三二年十一月の選挙では三三・一パーセントの得票率しか得られず、すでに党勢に陰りが見えた。フランツ・フォン・パーペンの画策によって、ヒンデンブルク大統領による首相任命という形で「権力掌握」をなし遂げた後の一九三三年三月の選挙においても、共産党首エルンスト・テールマンの逮捕をはじめとする、共産党および社会民主党への弾圧、突撃隊・親衛隊のテロルによる——ナチ側の犠牲者一八名を含む——六九名の殺人という無法状態の中で選挙戦を繰り広げたにもかかわらず、四三・九パーセントの得票率に留まった。<sup>(3)</sup> 山下公子が言うように、「大統領緊急令による政令、警察組織の悪用などによって、これ以上ないほどの不正な選挙運動を行ないながら、この選挙でNSDAPが単独過半数をえられなかったこと」<sup>(4)</sup>は、記憶しておいていい。

国会選挙で単独過半数を獲得できなかったため、ヒトラーは「権力掌握」時の、DNVPとの連立政権を維持せざるを得なかった。それゆえ、ナチ党の期待だけではなく、DNVPの期待にも応えねばならず、また、この連立政権自体からうじて過半数を確保するものでしかなかったため、彼を必ずしも積極的に支持しなかった保守派、財界、国防軍、官僚、宗教者、労働者、農民の期待にも応えねばならなかった。<sup>(5)</sup> その結果、ヒトラーは——共産主義者、社会主義者、ユダヤ人を除く——すべてのドイツ人に支持される行動を取らねばならなかったのである。この奇妙な独裁の形態を、イエツケルは次のような言葉で表現する。「ドイツ人に対するヒトラーの支配は、主にテロだけに頼っていたわけ

ではないことが強調されねばならない<sup>(8)</sup>。一九三三年十一月にヒトラー政権のもとで二度目となる国会選挙がおこなわれ——六月以降、DNVPを含む六政党に順次解散命令が出され、七月の政党新設禁止法によって一党独裁体制が確立していたドイツで、それはナチ党への信任投票に過ぎなかったが——そこで投票率九五・三パーセント、ナチ党の「指導者リスト」への賛同票は九二・二パーセントに達した<sup>(9)</sup>ことは、イエツケルの「ドイツ人に対するヒトラーの支配」の分析がかなり真実に近いことを裏書きするものだと言えるだろう。ドイツ人は、テロルの恐怖におののいてヒトラーを支持したのではない。彼らは「ヒトラーのことを恐れたというよりも、むしろ愛した」からこそ、この独裁者を支持したのである。

実際、多くのドイツ人はヒトラーを批判したりはしなかった。突撃隊が街頭で共産主義者やユダヤ人にいかなる暴行を加えようと、精神病者が「生きるに値しない命」として何万人殺されようと、それはヒトラーの責任ではなかった。もしも「総統がそれを知っていたら」、そのような暴虐は許されるはずはなかったと、彼らは信じていた<sup>(10)</sup>。くわえて、ヒトラーの演説は「国民の気分」を高揚させた。戦時中、演説がラジオで中継されなくなると、「総統の声をもう一度聞きたい」と彼らは思った。ニュース映画にヒトラーが姿を見せないと、「総統を見たい」と彼らは願った<sup>(11)</sup>。国民を支配するためにヒトラーが何よりも必要としたのは国民各層の人気だったが、それはヒトラーの政治的手法や世界観への賛同というよりも、むしろ「国民の気分」という形でもたらされた。

「オリンピック、スペイン、ロンドンでの交渉の成果は国民の気分<sup>(12)</sup>に良い影響をおよぼし、多くの不愉快な問題を乗り切る手助けをした」、と一九三六年の報告に書かれていた。ほとんど何も起こらなかった次の年に国民の気分<sup>(13)</sup>はどん底に落ち込んだ。一九三七年五月の報告によると、「この時期国民同胞の不満はかなり大きく、人々は原料

の不足をナチ政府のせいに行っている。」その後オーストリアの併合は「歓呼と喜び」を沸き上がらせた。ズデーテン危機では「戦争の不安」が、そしてミュンヘン会談以後には再び「高揚した気分」が支配的であった。<sup>(12)</sup> (傍点筆者)

一九三〇年代後半の戦争前夜、このように高揚と阻喪のあいだを揺れ動く「国民の気分」は、戦時中になっても変わらない。一九三九年九月の戦争開始とともに「気分」は再び不安へと傾くが、一九四〇年六月の西部戦線での勝利は「全ドイツ国民のなかに今まで一度も実現されなかった国内のまとまり」<sup>(13)</sup>をもたらしただけという。その後、戦況の悪化によりドイツ諸都市への空襲が始まると、一九四二年以降厭戦気分が高まるが、そうしたなか、ドイツを最後の破局から救うために、クラウス・フォン・シュタウフェンベルク大佐を中心に計画されたヒトラー暗殺未遂事件が起こる。一九四四年七月二〇日、総統本営の置かれたヴォルフスシャンツェの作戦会議室に、シュタウフェンベルク自身の手で時限爆弾が設置され、数分後、時限爆弾は予定通りに爆発した。この爆発によって列席者二四名中、七名が重傷を負い、うち四名が後に死亡したが、ヒトラーは軽傷を負っただけだった。その男の死によって「数十万人の命を救い、数百万人の虐殺に終止符を打ち、ドイツを最終的な破滅から守るはずだった」<sup>(14)</sup>暗殺計画は、かくて失敗に終わり、連動して予定されていたクーデター「ヴァルキューレ作戦」もパリを唯一の例外として不発に終わったが、この事件を知った国民のあいだに沸き起こったのは、「ヒトラーへの同情と謀反人への憤激」<sup>(15)</sup>だった。この反応について、イエツケルは次のように述べる。

一九四四年七月二〇日のヒトラー暗殺計画が、少数の例外を除き、いわば「異口同音」に否定され、かえって「総統へのきずな」を深めたことは注目してよい。<sup>(16)</sup> (傍点筆者)

ドイツと人類のために企てられた暗殺計画へのこの理不尽な非難の声が何に由来するのか、イエツケルにはわかっていない。

ドイツ人のヒトラーに対する態度の根底にあったのは、賛美や尊敬、まして恐怖などでなかったと思える。戦争中は特にそうであったが、それはちょうど子供が愛する父親にみせる心服のようなものであり、同情にまで高まった。<sup>(17)</sup>

講演「ヒトラーとドイツ人」(一九七九)においてイエツケルが提示した、この愛される父親としてのヒトラー像は、今では広く認知されていると言っていいだらう。田野大輔は『魅惑する帝国——政治の美学化とナチズム』(二〇〇七)において、峻厳なカリスマ的指導者としてのヒトラー像に疑問を呈し、次のように言う。「ヒトラーを超人に仕立て上げ、総統崇拜を制度化した」のはゲッベルスであるが、「彼のつくりあげたヒトラー像を民衆が無批判に受け入れたかどうかは非常に疑わしい」<sup>(18)</sup>。田野によれば、レニ・リーフェンシュタールもまた『意志の勝利』(一九三五)で、飛行機で空から舞い降りてくるヒトラーの姿に「救世主の到来」<sup>(19)</sup>のイメージを重ねあわせたが、そこに見られる民衆の姿は、「独裁者に忠誠を誓う従者」というよりもむしろ、「アイドルに声援を送るファン」<sup>(20)</sup>に近い。であれば、ファンに声援を送られるヒトラーは、いわば「笑顔をふりまくスター政治家」<sup>(21)</sup>であり、この「世俗的カリスマ」は、「普通の人間」にのみ可能な「親密さのイメージ」を呼び起こすことによって、民衆に愛されつつ民衆を支配するのである。<sup>(22)</sup>

最近では、對馬達雄が『ヒトラーに抵抗した人々——反ナチ市民の勇氣とは何か』(二〇一五)において、「プロパガ

ンダとテロル、密告と監視の警察国家というイメージ」をヒトラー独裁の一面として認めつつ、「現実には彼は絶大な人気があった」と述べている。

国民大衆の大半はナチ体制の経済的受益者として行動し、ナチ指導部も支持をつなぎ止めようと様々な手立てを講じた。宣伝相ゲッベルスの日常的なプロパガンダや、親衛隊長官ヒムラーの秘密国家警察の威嚇があったにしても、一方的な強権支配ということではなかった。

そのような状況のなか、イエツケルのいう「少数の例外」として、反ナチ抵抗運動に立ち上がった人々がいた。「近代ドイツ陸軍の父」大モルトケの末裔たるヘルムート・フォン・モルトケ伯を主宰者とする「クライザウ・クライス」、元ライプツィヒ市長カール・ゲルデラー率いる保守帝政派「ゲルデラー・クライス」、陸軍参謀総長ルートヴィヒ・ベック將軍を総師とする国防軍の反ヒトラー・グループ、マルティーン・ニーメラーを指導者とする「告白教会」、シヨル兄妹をはじめとするミュンヒェン大学学生たちの反ナチ組織「白バラ」のほか、ゲシュタポによって「ローテ・カペレ（赤い楽団）」と命名され、戦後も冷戦期を通じてソ連のスパイ網と見なされてきた反ナチ市民グループ、ルート・アンドレーアス・フリードリヒの『影の男——日々の記録一九三八—一九四五』（一九四七）にその活動の記録を残したユダヤ人救援グループ「エーミールおじさん」等が知られているが、なかにはヒトラー暗殺のため一人でビュルガープロイケラーに爆弾を仕掛けた家具職人、ゲオルク・エルザーのような人間もいた。

彼らは単独で、あるいは互いに連携しつつ抵抗運動を進めていた。「クライザウ・クライス」と「ゲルデラー・クライス」は一九四三年一月に会合をもち、クーデター成功後をにらんだ「影の内閣」まで構想していたが、そこではルー

トヴィヒ・ベックを暫定国家元首に、カール・ゲルデラーを首相に、「ゲルデラー・クライス」の一員である外交官ウ  
ルリヒ・フォン・ハッセルを外相に、そして後に「七月二〇日事件」の実行者となるクラウス・フォン・シュタウフェ  
ンベルクを国防次官補にすることが予定されていた。<sup>(26)</sup> また、シュタウフェンベルクは、兄のベルトルトを介して個人的  
にも「クライザウ・クライス」のモルトケと接触していたし、さらには弾圧され地下に潜っている左翼系、労組系の活  
動家たちとの対話も求めている。<sup>(26)</sup>

反ナチ抵抗運動には、このように思想的には保守派からリベラル派、左翼まで、階層的には貴族および官僚・軍部エ  
リートから一般市民、学生、職人、労働者までの幅広い人びとが加わっていたが、数の上では限られた少数派であり、  
彼らの存在はヒトラーを支持する圧倒的多数の民衆に包囲されていた。それゆえ彼らは、ナチ占領地のレジスタンスの  
闘士とは異なり、「抵抗者」の栄光に包まれることのない「反逆者」であるしかなかった。「七月二〇日」のヒトラー暗  
殺が失敗したとき、暗殺計画の首謀者の一人であった東部中央軍参謀長ヘニング・フォン・トレスコウは「いまにドイ  
ツ中がわれわれに襲いかかり、罵るだろう」と言って自決したが、事実、事態はそのとおりになった。<sup>(27)</sup> 事件に関与した  
「犯罪分子」の逮捕は——事件に無関係だった人間も含む——七千人にのぼり、この「卑劣で許しがたい愚かな将校た  
ち」の「犯罪」に激怒したヒトラーの報復は、首謀者の妻、子ども（最年少は生後十日の新生児）、近親者にまで及ん  
だ。<sup>(29)</sup> そして、それを見た国民は、この非道な報復に胸を痛めるどころか、拍手喝采したのである。

彼らだけではない。「白バラ」のハンス・シヨル、ゾフィー・シヨルの兄妹が大学構内で反逆的ピラをまいた罪でク  
リストフ・ブロープストとともに処刑された一九四三年二月二二日の夕方、ミュンヘン大学ではナチ学生同盟による  
デモがおこなわれ、三千人以上の学生が参加して政府に対する忠誠を表明した。そこでは、シヨル兄妹を密告した大学  
の用務員が歓声とともに迎え入れられたという。<sup>(30)</sup>



反ナチ抵抗運動に身を捧げた人びとのこのような孤立と悲慘について、對馬達雄は次のように言う。

ドイツ人の反ナチ活動とは、報われない孤独な現実に身を投じることであった。にもかかわらず彼らはなぜそのように決断し行動したのだろう。この問いの行きつく先は、ヒトラーのドイツと異なる、彼らの思い描く祖国ドイツ、要するに「もう一つのドイツ」のためというほかない。<sup>(11)</sup>

「反逆者」の汚名を着せられると知りつつ、彼ら「抵抗者」を行動へと駆り立てたもの——それは「もう一つのドイツ」への思いであったと對馬は言う。それが必ずしも「失われたドイツ」、つまりヴァイマル共和国や「第二帝国」への回帰を志向するものでないことは、すぐに明らかになるだろう。というのも、ここでは一般化して述べられているが、「もう一つのドイツ」という言葉で對馬がもっとも強く想起しているのは、ナチ体制崩壊後のドイツ再建計画としてモルトケを中心に構想された「未来のドイツ」だからである。

「クライザウ構想」と呼ばれるその再建計画において、モルトケからはまず第一に、二度とヒトラーを招来しない国家を作ることを考えた。本来彼らはヴァイマル民主政の支持者であったが、当時世界で最も民主的といわれたその体制下で合法的にナチ党が権力を掌握した以上、もはやヴァイマル的民主主義には戻れない。だから「クライザウ構想」においては、州議会以上の直接選挙は廃止され、国会選挙の場合、各州議会による間接選挙とされた。「デモクラシーは、つねに大衆煽動にさらされ容易に衆愚政治に陥るか独裁制さえ引き出す危険なもの、条件付きで有効に機能するものである<sup>(12)</sup>」という認識を、彼ら「クライザウ・クライス」の人びとは持っていたのである。

そのような条件付きの民主主義国家を再建するために、彼らは第二に、キリスト教精神に依拠しようとした。街頭テ

口、精神病者の安楽死、ユダヤ人のホロコーストを推し進めるナチ・ドイツには、「人間愛」を説くキリスト教精神はもはや存在しないかに見えたが、社会の各組織がごとごとくナチ化されるなか——「ドイツ的キリスト者」たちの「帝  
国教会」はあったものの——教会はかろうじてナチズムを拒否する組織として存在していた。そこに着目したモルトケ  
らは、ドイツを再びヨーロッパ世界の一員に引き戻すためには、宗教倫理としてのキリスト教精神が——個人のレベル  
ではなく——国家のレベルで必要であると考えた。その結果として、「クライザウ構想」の「前文」には次の言葉が記  
されている。「ドイツ国政府はキリスト教的精神をわが国民の道徳的、宗教的な革新、また憎悪と虚偽の克服さらにヨー  
ロッパ諸国民共同体の再建の基礎であると考える」<sup>33</sup>。

とりわけ意識されたのが、キリスト教精神を教育の中心に据えることである。ナチ時代には、ヒトラーユーゲントが  
ナチ思想の注入機関として機能し、子どもたちはそこで反宗教感情を吹き込まれた。その結果、教師との信頼関係も親  
子の情愛も破壊され、教育の場は荒廃した。荒廃した教育の場にもう一度キリスト教精神を甦らせることによって、学  
校、家庭、国を立て直すことを「クライザウ構想」は求め、次のように主張する。「父母はわが子をキリスト教の諸原  
則と良心の求めるところに従い、教育する権利がある。国もまた家族の内的・外的な分裂状態を克服するのに寄与しな  
ければならない。(……) 家族、教会および学校は教育活動を共同しておこなう。(……) 学校は子どもの倫理的能力を  
呼び覚まし、強化し、(……)。国家的な学校は両宗派の宗教教授を必修科目とするキリスト教的学校である」<sup>34</sup>。

このように見てくると、「クライザウ構想」が描く「もう一つのドイツ」とは、キリスト教精神にもとづく国家の再  
生であることがわかる。まずは教育の場にキリスト教精神を甦らせることによってナチズムの非人間性を払拭し、教育  
を通して国民を再び倫理的存在へと高め、そうすることでドイツをヨーロッパの伝統につながる国家へと再生すること  
——それが「クライザウ・クライス」が未来に望んだ「もう一つのドイツ」であるとすれば、逆に彼らを反ナチ活動と

いう「報われない孤独な現実」へと向かわせたのも、彼らの内なるキリスト教精神であると、おそらく對馬は考えているだろう。そしてそれは、「クライザウ・クライス」のみならず——共產主義者と異教徒を除く——他のすべての「抵抗者」にも共通する、反ナチ抵抗運動の基底にある動機だろうと。

はたしてそうだろうか。たしかに、「クライザウ・クライス」に集った人びとは、モルトケをはじめとして敬虔なキリスト教者ばかりだった。彼らを反ナチ抵抗運動へと向かわせた心情ないし信念の基底にキリスト教精神があるのはまちがいないだろう。だがそこにあったのはキリスト教精神だけだっただろうか。

というのも、ハンス・ロートフェルスによれば、教育問題を論じた「クライザウ構想」には、次のような考えもまた存在していたからである。

モルトケとその友人たちは、たんなる實用主義、いわゆる「実践的」教育には、それがいかなるものであれ断固として反対だった。彼らはドイツのギムナジウムの古典語教育の伝統を維持し、職業学校と大学を区別することに固執した。大学は普遍的な研究と教育の場でなければならない。<sup>(35)</sup>

ここでモルトケらが主張しているのは、ヴェイルヘルム・フォン・フンボルトに遡るドイツ人文主義の教育理念そのものであると言つてよい。一八〇〇年頃のドイツでは、二つの教育改革が対立していた。ひとつは、旧来の大学の些末で独断的な学問を拒否し、市民社会の役に立つ知識を教えようとする啓蒙派の教育改革であり、かれら啓蒙派は「職業教育」を大学に求めていた。もうひとつは、フンボルトら人文主義者たちの教育改革であり、こちらはそのような「實用主義」を斥け、実学とは無縁の純粹な学問を大学に求めた。哲学的思惟と結びついた純粹な学問に専念し、「教養ある人間で

あること」という知的・倫理的高みにむけて自己形成することが大学における教育目的だと、彼ら人文主義者たちは考えていた。<sup>(36)</sup>その後、「フンボルトの理念」に基づいた大学がベルリンに作られ、同時に古典語教育を中心とする中等学校であるギムナジウムもフンボルト自身の手で制度化されるが、ドイツの研究と教育のレベルを飛躍的に高めたこの人文主義的教育機関も、二十世紀に入る頃には時代遅れとの批判にさらされるようになり、ナチの時代にはこうした教養理念はもはや風前の灯火であった。そのドイツ人文主義の教育理念を、モルトケらは再興しようというのである。

ロートフェルスの『ドイツの反ヒトラー運動』には、それ以外にも興味深い指摘が少なからずある。たとえばシュタウフェンベルク大佐について、彼がシュヴァーベン出身のカトリック教徒であることと並んで「音楽的才能と人文主義的教養の持ち主で、シユテファン・ゲオルゲを囲むえり抜きのクライスの一員」(傍点筆者)であったと告げた後、こう言われる。

彼の中では、他の人と同様、プロイセンの学校で教育を受けた参謀本部付将校らしい知的な明晰さが、純粹な精神性と結びついていた。それが彼を、時代の陰鬱な権力との闘い、戦時であれ平時であれ、あらゆる種類の非人間的政治との闘いにおける、生まれながらの指導者にしたのである。<sup>(37)</sup>

「他の人と同様」と言われているのは、反ナチ抵抗運動にプロイセン出身のエリート将校が少なからず加わっていたからであろう。事実、その直前の記述では、国防軍反ヒトラー勢力のリーダーであったベック將軍が、「十八世紀の普遍的教養とヨーロッパ的知性が、プロイセンの伝統である本質的諸原理と一体になっている、稀な人物の一人」(傍点筆者)<sup>(38)</sup>として紹介されている。

さらにもう一例あげれば、クーデター成功後をにらんだ「影の内閣」で外相になるべく予定されていた元ローマ駐在大使ウルリヒ・フォン・ハッセルについて、あの世界危機のさなかにダンテを読み、「第三の人文主義」の代表者たるヴェルナー・イエーガーの『パイディア』にコメントする「教養ある貴族主義者」であり、彼の存在は、「人文主義とキリスト教の伝統にヨーロッパが回帰することのうちに希望のきざしを見るすべての人びとにとって（……）混沌の時代に蒔かれた種となるだろう」（傍点筆者）とされている。

ハッセルにおいては、人文主義精神とキリスト教精神との共存が示唆されているが、いずれにせよロートフェルスの記述からは、反ナチ抵抗運動の中核にいたメンバーの多くが「人文主義的教養」の持ち主であり、そのことにロートフェルスが強い印象を受けていることがうかがえるのである。だがそれは、ロートフェルスならずとも感じることでないだろうか。

「白バラ」のピラを想起してみよう。そこには、ヒトラーと、ヒトラーに唯々諾々と従っている同胞への強い弾劾が格調高いドイツ語で書き記されているが、その際折りに触れ引用されるのは、ゲーテであり、シラーであり、ノヴァーリスであり、アリストテレスであった。それはただ、ピラの作成者が「人文主義的教養」を知識として身につけていることを示すだけでなく、彼らがドイツ人文主義の精神を自らの生きる指針として血肉化していることを示すものであった。「白バラ」の第一通信を見よう。

国家自身はけっして目的ではない。それはただ、人類の目的が果たされるための条件として重要であるに過ぎない。そして、人類のその目的とは、人間の持つすべての力を十分に伸ばすこと、つまり進歩することに他ならない。<sup>(40)</sup>

シラーの「リケルゴスとソロン立法」からの引用であるが、この一節は、人間形成とその完成を目指す歩みを何よりも重要視したフンボルトの次の言葉と響き合う。

人間の真の目的は——移り気な好みによるのではなく、永遠に不変の理性によって規定されているその目的は——自分の持っている力をもっとも高度に、また均斉をとって形成し、ひとつの全体へといたることである。<sup>(4)</sup>

「白バラ」のピラが示しているのは、このピラをミュンヘン大学でまいた学生たちが、フンボルトやシラーが百数十年前に掲げたドイツ人文主義の理想を、自らの理想として生きようとしていたという事実である。「白バラ」のメンバーには、ハンス・シヨルをはじめ、クリストフ・プロプスト、アレクサンダー・シュモレル、ヴィリ・グラーフ等、医学部の学生が少なからずいた。ゾフィー・シヨルは生物学と哲学を学んでいた。そして、グループの中心には哲学のクルト・フーバー教授がいた。そこには、専攻は何であれ、哲学を中心に純粋な学問を追究することによって「自分の持っている力をもっとも高度に、また均斉をとって形成し、ひとつの全体へといたる」というフンボルトの理想を具現した風景が開けているかのようだ。

このように見てくると、反ナチ抵抗運動を支えるものとして對馬が想定したキリスト教精神とは別の、もうひとつの精神を想定することができるだろう。「人文主義の精神」とそれを呼ぶことができるなら、この人文主義の精神がいかにして反ナチ抵抗運動を支える精神的基盤のひとつとなりえたのかを——人文主義の精神とキリスト教精神の関係を含めて——抵抗運動に加わった個々の人びとに即して検証していくことが、今後の課題となる。

附記

本稿は、今後書き継がれるべく構想されている「人文主義とナチズム」の序文である。

註

- (1) エバーハルト・イエツケル『ヒトラーの世界観——支配の構想』、滝田毅訳、南窓社、一九九一年、一二六頁。
- (2) 同書、一二七頁。
- (3) 滝田毅「訳者あとがき」、同書一七一頁。
- (4) ハイנטツ・ヘーネ『ヒトラー独裁への道——ワイマール共和国崩壊まで』、五十嵐智友訳、朝日新聞社、一九九二年、四四〇頁。ノルベルト・フライ『総統国家——ナチスの支配 一九三三—一九四五年』、芝健介訳、岩波書店、一九九四年、五三頁以下。
- (5) 山下公子『ヒトラー暗殺計画と抵抗運動』、講談社、一九九七年、一四頁。
- (6) D N V P (Deutschnationale Volkspartei) は「ドイツ国家人民党」と訳されることが多いが、N S D A P (Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei) を「国民社会主義ドイツ労働者党」と訳す立場からすれば、「ドイツ国民民族党」と訳すべきであろう。なお、芝健介はノルベルト・フライ『総統国家』において「ドイツ国粹国民党」と訳し、池田浩士は『ヴァイマル憲法とヒトラー——戦後民主主義からファシズムへ』（岩波書店、二〇一五年）において「ド

イツ国粹民族党」と訳している。いずれも、その右翼的体質を勘案してのことと思われる。

- (7) イェツケル、前掲書、一三七頁。
- (8) 同書、一三三頁。
- (9) 石田勇治『ヒトラーとナチ・ドイツ』、講談社、二〇一五年、一七六頁以下。
- (10) イェツケル、前掲書、一二七頁。
- (11) 同書、一三一頁。
- (12) 同書、一三〇頁。
- (13) 同右。
- (14) グイド・クノップ『ドキュメント ヒトラー暗殺計画』、高木玲訳、原書房、二六七頁。
- (15) 對馬達雄『ヒトラーに抵抗した人々——反ナチ市民の勇氣とは何か』、中央公論社、一四三頁。
- (16) イェツケル、前掲書、一三一頁。
- (17) 同右。
- (18) 田野大輔『魅惑する帝国——政治の美学化とナチズム』、名古屋大学出版会、二〇〇七年、二一六頁。
- (19) 同書、二二〇頁。
- (20) 同書、二二二頁。
- (21) 同書、二四八頁。
- (22) 詳しくは、大川勇「人文主義者のヒトラー像——序 ヒトラー像の変遷」、京都大学人間・環境学研究所ドイツ語部会『ドイツ文学研究』第六十号、二〇一五年、六頁以下を参照。



- (23) 對馬、前掲書、i頁。
- (24) 同書、iv頁。
- (25) Rothfels, Hans: Die deutsche Opposition gegen Hitler. Eine Würdigung. Ungekürzte, stark revidierte Ausgabe. Frankfurt am Main u. Hamburg 1958, S. 104. (ハンス・ロートフェルス『第三帝国への抵抗』、片岡啓治・平井友義訳、弘文堂、一九六三年、一五〇頁。)
- (26) 對馬、前掲書、一二五頁以下。
- (27) 同書、一四四頁。
- (28) 同書、一四二頁。ただし、山下公子によれば、「かつていわれた逮捕者七千人、処刑者七百人以上という主張には資料の裏付けがない」(山下、前掲書、二三四頁)。もっとも、山下の推測する、逮捕者「六百から七百人」という数字にも、裏付けとなる資料は明示されていない。
- (29) 對馬、前掲書、一四二頁、および一四五頁以下。
- (30) J・P・スターン『ヒトラー神話の誕生——第三帝国と民衆』、山本尤訳、社会思想社、一九八三年、一九四頁以下。この邦訳書の原本と独訳は以下のとおり。Stem, Joseph Peter: Hitler. The Führer and the People. Glasgow 1975. / J. P. Stem: Hitler. Der Führer und das Volk. Aus dem Englischen von Autor und von Fred Wagner. München 1978.
- (31) 對馬、前掲書、v頁。
- (32) 同書、一八〇頁。
- (33) 同書、一八四頁。
- (34) 同書、一八七頁。なお、ここで對馬が「国家的な学校」と訳しているのは、「国立学校」のことだと思われる。ロート

フェルスの前掲書には、引用文ではないが同じ内容の文が記されており、そこでのドイツ語は「die staatlichen Schulen」である。(Rothfels, a.a.O., S.126.)

- (35) Rothfels, a.a.O., S.126. (同書、一八三頁以下。)
- (36) 詳しくは、大川勇「フンボルトの教養理念——フンボルトからシュティフターへ」、京都大学人間・環境学研究所『ドイツ文学研究』第五十号、二〇〇五年、三七頁以下を参照。
- (37) Rothfels, a.a.O., S.79f. (同書、一〇九頁。)
- (38) a.a.O., S.78. (同書、一〇七頁。)
- (39) a.a.O., S.97. (同書、一三八頁。)
- (40) Scholl, Inge: Die Weiße Rose. Erweiterte Neuauflage. Frankfurt am Main 1993, S. 77. (インゲ・シヨル『白バラは散らず』、内垣啓一訳、未来社、一九六四年、一二〇頁。)
- (41) Humboldt, Wilhelm von: Ideen zu einem Versuch, die Grenzen der Wirksamkeit des Staats zu bestimmen. In: Wilhelm von Humboldts Gesammelte Schriften. Hrsg. von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften. Band I. Hrsg. von Albert Leitzmann. Berlin 1903, S. 106.